

野菜を使った教材の授業評価 ～さつまいも栽培を通して～

稲生 弘志

キーワード：さつまいも、壁画、野菜スタンプ、クリスマスリース

1 はじめに

子どもは自然の中で遊んで感じたことを、体で表したり歌を歌ったり物を作ったり絵を描いたりして表現する。自然との関わりは生活の営みの中で見方や感じ方、考え方を広め深める役割を担う。例えば、子どもは水溜まりの中に長靴で足を入れる瞬間、「キャ～」と手を小刻みに振り感情を言葉に発し「パチャパチャ」とオノマトペ（擬音語）で水音を表現する。また、水溜まりにできた波紋に触れようと何度も何度も長靴で水を踏みつける。その遊びの行為はきっと水や土の音や感触を確かめ、水や土と自分との関係性や距離を築いていると言える。遊びの行為が終わっても水溜まりの様子を再現するかのように足で床を鳴らしながら鼻歌を歌う。水溜まりのような自然が生み出すもので遊ぶことで、子どもは豊かに生きることができ、自分の感性や創造性を育てていると考える。美術教育研究者の磯部は著述の中で¹、造形活動で育まれるものについて興味深いことを述べている。「造形活動がより喜びを感受できるものであるためには、人や物や生き物や出来事のつながりにある生活そのものが深い実感のあるものでなければならないだろう。その最も拠り所となるものが、豊かな質感と四季の変化と表情をもった自然である。その中にあるモノや出来事とのさまざまな出会いの中で、十分な時間と場が保証されることによって、子どもたちは主体的に造形を生みだし、喜びを感じるのである。そのためには大人が自然のモノや出来事とのかかわりを

¹ 磯部 錦司「四季をアートする表現者たち」P 147、『自然・子ども・アート』フレーベル館、2007年

意識的に生みだし、子どもの生活と表現をつなげていく感性と働きかけが必要」と述べている。子どもの造形を豊かに育むためには、自然との関わり方が大切であり、それは大人の子どもへの向き合い方や提示の仕方にかかっている。そこで私は、さつまいも栽培を通した教材開発を行うことで、学生の子どもへの指導法を向上させて子どもがより豊かに生きるための造形の授業を探っていきたい。

2 研究の目的

保育者を目指す学生が、子どもが生きる喜びを感じ、造形で表す際の実践的指導力を身に付けることは重要であると考えます。さつまいも栽培を行い、学生が自然と関わる造形活動の具体的な実践を試みるとともに、授業評価の分析と考察を通して、成果と課題を明らかにすることを目的とする。そして、短大の授業にフィードバックし、保育現場への実践的な授業に役立てたい。

3 研究方法

稲生ゼミ13名（1年6名、2年7名）が、土起こし、肥料撒き・土作り、マルチ張り、苗植え、水やり、草取り、さつまいも収穫、蔓の取り出しの一連の農作業を伴うさつまいも栽培を行い、草や虫との共存とともに育つ自然の恵みを体感し、さつまいもを通した造形表現への拘りを高める。そして、筆者が担当する授業で壁面絵画、さつまいも収穫の絵画野菜スタンプ、蔓を使ったクリスマスリース作りを行い、評価の分析と考察をする。

4 研究実践

4-1 土起こし～蔓の取り出しまでの一連の農作業

(1) 泥と子どもについて

子どもは草むしりで草の中にいる虫や、土を触ることに興味を惹かれてやるべき作業が進まないことがある。自分で腕や足に泥や土を付けたりこねた

りと、自分の存在を確かめている。石川は『精神としての身体』の中で²、自分で自分の体にさわる行為について「さわるものとさわられているものとの同一性の直観によって、二重感覚は、主体としての身体と客体としての身体、内面的身体と外面的身体とをむすびつけ、融合させる」と述べている。つまり、さわられる側の自分と、意志をもってさわろうとする自分がいて、土や泥を介して自分が自分にさわる行為は、両者が融合しようとする行為だと言える。そう考えると、土や草にさわるなどの大人から見たら何の意味のない行為は、自分の存在を確かめるための大切な行為だと考える。

(2) 生き物を観る、触れる、感じる

岡崎はその著述の中で³、実際に植物と関わる造形活動をする前に「種をまいて植物を育てる、芋掘りなどで実際に自分が収穫した野菜を食べる、散歩の途中で紅葉した葉を眺めたり、木の肌に触れてみるといった植物とかかわる日常生活経験を積ませることが、その後の植物を用いた造形活動をしていく上で、重要な意味を持つことになるということを知っておかなくてはならない。」と述べている。つまり、農作業を行うことで、生き生きした子どもの造形が生み出されるということである。また、岡崎が「このような活動では、活動の途中で脇道にそれたり、できたもので遊び始めたりすることも、おおらかに受け止められるような思慮深い態度も必要」と述べているように、植物を用いた造形を行う上での保育者のあるべき立ち位置を示していると考ええる。

(3) 農作業の実際と評価（1、2年生稲生ゼミの学生より）

1、2年の稲生ゼミの授業で、土起こし（写真1）、肥料撒き、畝作り、マルチシート張り（写真2）、苗植え（写真3）、水撒き（写真4、5）、草取り（写真6）の作業を行った。午前中は日が差さず栽培に適さない畑であったが、学生の献身的な作業の結果、6月中旬ごろより葉が順調に増えてきた。

² 石川浩「第一章現象としての身体」P 89、『精神としての身体』講談社学術文庫、1992年

³ 厚岡崎哲「身近な自然環境とのかかわりを通して」P 103、野村知子、中谷孝子編『幼児の造形』保育出版社、2002年

学生は学校生活の中でさつまいもを話題に挙げたり、休み時間に観察したりするなど、農作業体験は学生のさつまいも栽培への関心を高めた。



写真1 土起こし(5月24日)



写真2 マルチシート張り(5月24日)



写真3 苗植え(5月30日)



写真4 水撒き(5月30日)

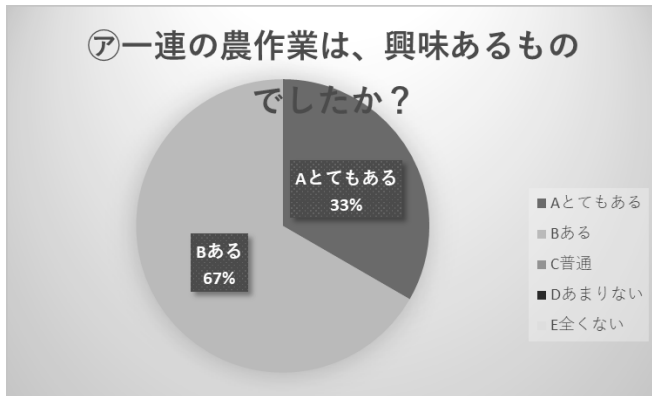


写真5 水撒き(6月20日)



写真6 除草(7月4日)

以下の㉗から㉙はアンケート結果である。



①それはなぜですか？

- ・ 1週間ごとの時間に成長過程を見ることが出来るのが楽しい。
- ・ 自宅でも母親がトマトやキュウリ等の野菜を育てているが、自分は携わっていない。学校での栽培作業は楽しかった。
- ・ 友達と作業するのが楽しかった。
- ・ 自宅でさつまいもを育てた経験があるのだが、育て方を忘れてしまった。思い出しながら作業した。
- ・ 農作業がないときも、壁画制作で葉を作ったり根を作ったりして、ワクワクすることができた。
- ・ 久しぶりに土いじりをして、懐かしい感じになった。
- ・ 見る度に葉が増えていく様子や、逆に萎れていく様子など、変化していく姿が面白かった。
- ・ 日の当たらない土地で果たして育つか興味深い。
- ・ 私は畑作業が好きで、みんなと楽しく作業ができた。
- ・ 大好きなさつまいもが少しずつ大きくなっていく過程が嬉しい。
- ・ 食育という意味で興味がある。
- ・ 日頃スーパーでさつまいもを買うことがあっても育つ過程はなかなか経験ができない。

- ・自宅や小学校でさつまいもを育てた楽しい思い出がある。それを再現できたのでうれしかった。

㊦一連の作業は、幼児の造形表現にどのように影響すると思いますか？

- ・作業を行うことで、育てたさつまいもを食べたり造形に使ったりすることへの期待やワクワク感が高まる。自分が育てたものという特別な感情が生み出される。
- ・クリエイティブな造形表現は、実体験が影響していると思う。
- ・ぐんぐん育つ楽しみ、成長した作物を食する楽しみ、仲間で力を合わせる楽しみが絵や工作にリアルに表現されると思う。
- ・草や虫に触れることは造形に影響を及ぼす。
- ・成長の仕組みを知ることは、子どもの想像力や発想力を伸ばす。
- ・土の中はどうなっているのか想像力が膨らむ。
- ・実際に目で見て触れることが大切だと思う。
- ・自分で育てたもので製作することは楽しい。
- ・活動の思い出は、絵に表しやすい。
- ・本物の土や葉、虫に触れることは、色彩感覚や感触を知ることができ、表現力が高まる。
- ・土をいじることから泥遊びや砂遊びに発展していけばいい。
- ・土に触れることは、子どもの造形によいと感じる。
- ・自分たちの作ったさつまいもを食べると一層おいしく感じると同様、例えば、さつまいもスタンプを製作する子どもの意欲は高いと思う。
- ・収穫の様子を想像しながら絵に描くのは、子どもにインスピレーションを与えられると思う。

10月24日と25日にさつまいも堀りを行った。育ててきたさつまいも

にいいよ出会えるということで、学生は意欲的にいも掘りに取り組んだ。
同時にクリスマス飾りのための教材に使用するため蔓を取り出して乾燥させた。(写真7、8、9、10)



写真7 さつまいも掘り(10月24日)

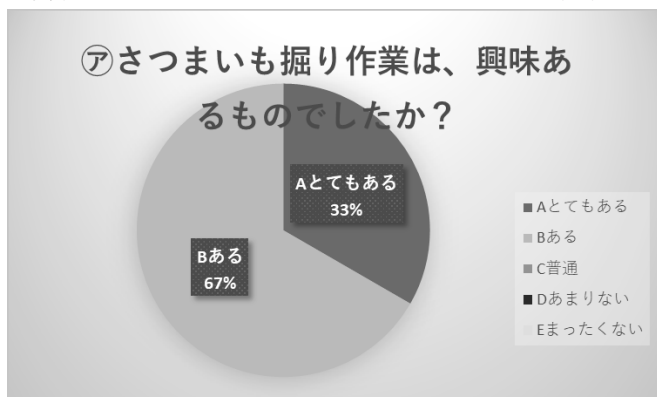


写真8 さつまいも掘り(10月25日)



写真9 蔓切り(10月24日)

以下の㊦から㊨はさつまいも掘りのアンケートの結果である。



㊧それはなぜですか？

- ・普段の生活で、自分が自らやることはない。とても興味深かった。
- ・秋の季節を感じられるから。
- ・さつまいもを掘っているとき虫が出てきた。自然を感じることができた。
- ・いつもさつまいもの生長が楽しみだった。(※廊下から畑が見える)
- ・どのくらいの大きさのさつまいもが育つか気になっていたから。
- ・日が当たらない畑だったので育つのか心配だった。でも、大きく育って

うれしかった。

- ・掘ること自体が楽しかった。それに、自分たちで育てた！という実感があったから。
- ・大学生になって自分で何か植えて収穫する機会がなかったから。
- ・日向ではさつまいもが大きく育ったが、日影では小さかった。日の当たり方で育ち方や大きさが違うことが分かったから。
- ・作ったさつまいもを食べるのが楽しみだから。
- ・自分たちで何かを育てることが小学生以来で楽しかったから。

㊦ さつまいも掘りは、幼児の造形表現にどのように影響すると思いますか？

- ・土を掘っていた時さつまいもを見つけた瞬間の嬉しさがある。そこを造形表現に生かせばいいと思う。
- ・いも掘りの絵などを描くことができる。また野菜を使った造形もできる。
- ・「さつまいもが土の中にある」「蔓、葉は地面の上にある」ことの体験は絵に描くことに役に立つ。
- ・蔓でクリスマスリース、いもで野菜スタンプ等、表現の幅が広がる。
- ・自然の色を見て色彩感覚が育ったり、土や葉っぱの質感や触感を感じ取れる力が養われたりすると思う。

4-2 季節の経過とともに描く内容が変化する壁画

(1) 生長の感動を表現すること

農作業での学生アンケートで「農作業がないときも、壁画制作で葉を作ったり根を作ったりして、ワクワクすることができた」「収穫の様子を想像しながら絵に描くことは、子どもにインスピレーションを与えらると思う」と答えているように、農作業と壁画制作は相乗効果をもたらしていると言える。前述の磯部は自然環境の有効性について、「土や水や風や植物や虫といった自然の素材や環境は、子どもたちの活動を主体的なものにし、子どもたち

は、五感を通した自然とその直接的な出会いによって見方や感じ方、考え方を広げていく」⁴と述べている。大人の学生もそうだったように、子どもも草取り中にミミズやいも虫やだんご虫を見つけるとその動きや形や色に惹かれて触ったり、「気持ち悪い」と友達同士で大きな声で言い合ったりするなど、たいへんな騒ぎとなる。虫との出会いをきっかけに、その子どもは心を動かされ、虫やさつまいも畑、さらには周りの環境への自分の思いを広げていくということだと言える。例えば、絵日記では生き物の生長を毎日の観察を通して、その思い出や感動を刻んでいく。相応しい自然環境を整えることは、子どもの表現が生き生きしたものになり、子どもの造形にとって重要な要素だと考える。

(2) 壁画指導の実際と評価（1、2年稲生ゼミの学生より）

さつまいもの生長を壁画で表現し、学内の図工室近くの廊下に掲示した。縦2m×横6mの大きさで、地面の茶色土は指導者で作成した。学生は何を描くか相談して共同制作に取り組んだ。6月中旬頃は葉も根も少なかったが、9月中旬には根は下に伸びて地面いっぱい多くの緑色の葉が生え、根に小さなさつまいもが成っている。畑を観察して製作を進め、壁画が時間の経過とともに変化した様子が見分かる。さつまいもは新聞紙で包んで立体感を出したり葉は様々な角度に貼ったりするなどして表現を工夫した。水撒き作業やさつまいも収穫の人物像を指導する際、同一人物を使って手や足、目、口、ポーズ等を自由で大胆に変化させる方法で人物像を描

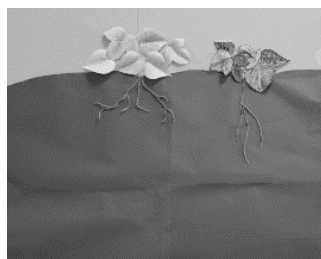


写真10 葉は少ない(6月中旬)



写真11 さつまいもが成っている
(9月中旬)

⁴ 磯部錦司「自然環境の有効性」P61、『自然・子ども・アート』フレーベル館、2007年

くことを筆者から提案した。(写真12) そうすることで、学生は人物のポーズや新たな形を作るなど、相談し合ってイメージに添うように取り組んだ。人物は生き生きと表現され、観る人を惹き付けていた。(写真13、14、15)

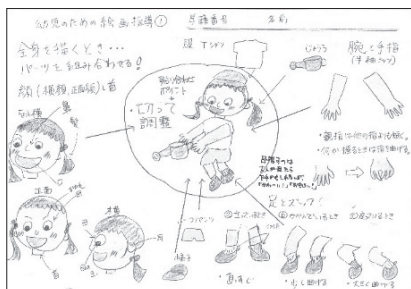


写真12 壁面指導プリント



写真13 水撒き



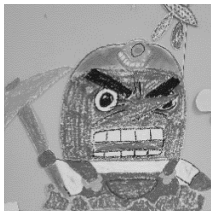
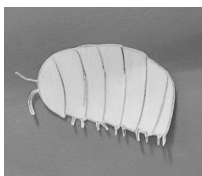
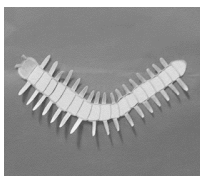
写真14 水撒き



写真15 さつまいも収穫

写真13では、水撒きの男児は、学生によるうれしさのあまりひっくり返っている形にした。観る人にインパクトを与えている。写真15の女児は、さつまいもが細くて小さかったので涙を流している。この指導法は一度描いたものを簡単にポーズを変化させたり付け足せたりするので、絵をより楽しむことができると考える。

土の中には、6月には見られなかったもぐらやだんご虫、むかで等の生き物が見られるようになった。(写真16) 学生のアンケートの中に「実際に目で見て触れることが、とても大切だと思う。」とあるように、農作業での経験が土の中に目を向けるきっかけになった。



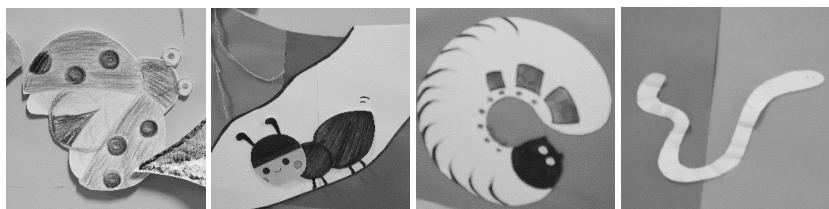


写真16 生き物

逆に、実際にいないもぐらを描いた学生がいたが「もしもぐらがいたら！と想像することが楽しかった。」という。壁面の様々な生き物は、観る人に瑞々しい印象を与える。さつまいもを育てることを通して生き物との共存を理解し、人も

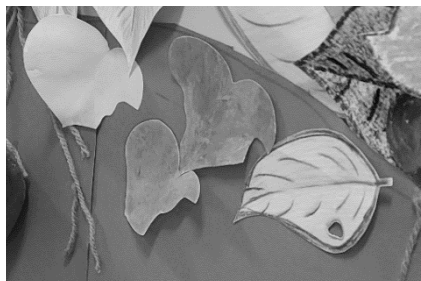
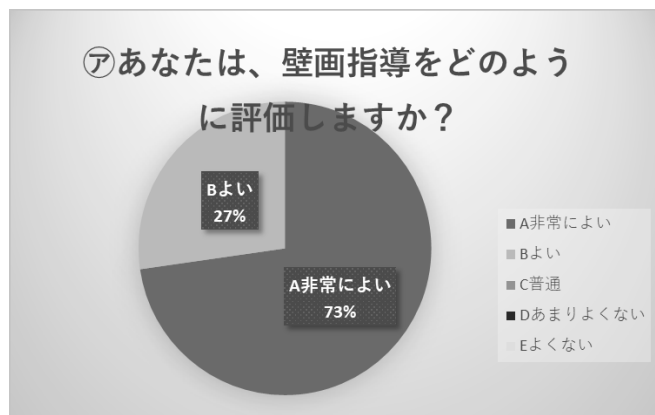


写真17 黄色に枯れた葉

植物も虫も共に生きている実感がうかがえる。学生は葉の幾つかに虫食いの跡をつけたり、緑色の葉ばかりでなく黄色に変色し枯れた様子にしたりした。(写真17) これはこれまでの自分の知識と農作業を経験したり畑をよく観察したりしたことが生かされている。筆者の授業で学んだにじみの表現技法を使って葉を描いている学生もいた。

以下の㊦、㊧は壁画指導のアンケートの結果である。



④それはなぜですか？

- ・さつまいも畑を見る度に葉の様子に変化が見られていたため、壁画も現状のさつまいも畑と同様に同じく変化させたいと考えた。
- ・葉が黄色になった頃にはさつまいもの実もできているだろうと予想して、壁画のさつまいもを作った。
- ・6月に植えた苗が、時間の流れとともに大きくなる様子を大きな壁画で表現したかった。
- ・畑のさつまいもが大きくなっていく喜びを、製作することでより感じる事ができたと思う。
- ・絵の具で「にじみ」を使って葉を作ったのは、徐々に葉が枯れて黄色やオレンジに変化していくことを表したかったからです。
- ・先生の壁画指導では、腕や足を動かせる、ポーズを変えられる以外に作った後に作品に付け足せる楽しみもある。
- ・この方法だと、じょうろで水を撒いた時やさつまいもを抜いた時の細かな体の動きを作ることができた。
- ・パーツを分担して1つの作品を作ることで、「友達と協力して」完成させたという意識が高まり、達成感を得ることができた。
- ・土の中には様々な生き物が生きていた。虫も大切な命であることを実感でき、それを壁画に表した。
- ・土の中で暮らしている生き物はどんなものだろうかと想像しながら、「土の中の町」として描けるところが壁画の良さだと思う。
- ・土起こしをした際に出てきた虫を絵で表すことができた。また、実際に見ていないが土にいますなもぐらを想像して作った。
- ・さつまいもを掘っているとき、さつまいもの葉や実の近くにもたくさんの生き物がいた。栄養のある土にはさつまいもも生き物も一緒に暮らしているんだと思った。壁画にはさつまいもばかりでなく生き物も描くことも必要だと思った。

4-3 さつまいもを使った野菜スタンプ

(1) 教材について

造形で野菜を使う目的は、野菜の形状や触った感触などに興味をもつ、野菜を五感で楽しむ、指先を使い細かい作業ができるようになることである。保育現場での指導では、未満児は野菜を見たことはあっても実際に触った経験は少ないので、まずは野菜をじっくり観察することで、その後の活動に興味をもてるようになるを考える。版の表現について、槇は著述の中で⁵「写す行為には、どうなるのかな？こうなるはず！というブラックボックスの通過があります。それが子どもの知的好奇心を刺激し、予想外の結果が想像力をかきたてます。」と述べている。野菜スタンプは偶然性や意外性が子どもの創作意欲を駆り立てる教材だと言える。

(2) 指導の実際と評価（2年生「幼児と環境」受講生より）

1、2年稲生ゼミが育てたさつまいもや他の野菜を使って野菜スタンプを行った。指導者からは学生に3つのことに重点を置いて指導した。1つ目は野菜の切り口を工夫することである。切り口が平らでないと画用紙に絵の具がしっかりと付かない。切り口を平らに切らずに野菜をスタンプした時うまく絵の具が付かない学生が何人かいたので、慎重に断面を平らに切るように指導した。2つ目はさまざまな角度から切ることを試してみることである。同じ野菜でも、切り口を変えることで異なる模様のスタンプが楽しめることを伝えた。しかし、実際の授業では切り口を変えて楽しむ学生は少なかった。3つ目は様々な好きな色をつけて楽しむことである。違う色を試しながらスタンプすることで、新たな発見に気付くを考える。学生が持参した野菜には、オクラ、レンコン、ピーマン、ブロッコリー、キャベツ等があり、様々な模様のカラフルな作品に仕上がった。（写真18）

⁵ 槇英子「版の不思議」P42、『保育をひらく造形表現』萌文書林、2008年



写真18 野菜スタンプの作品

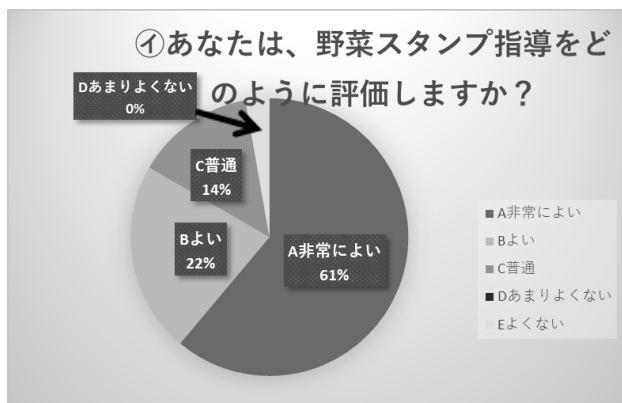
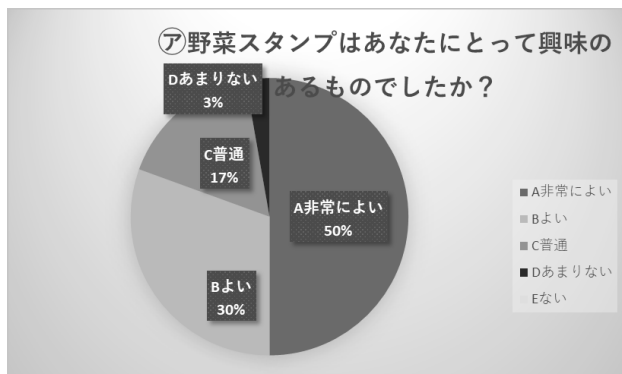
筆者から「野菜スタンプの衣類を物干しざおに干そう」と学習課題を設定し、どんな衣類を野菜スタンプしたいか学生に投げかけたところ、洋服、パンツ、帽



子、ぬいぐるみ、靴下等、画用紙を思い思いの形に切り製作した。ボタンをオクラの模様にしたり、ピーマンを服の全体に配してカラフルにしたりして

工夫していた。また、さつまいもを一度スタンプした後、同じ箇所違う色でスタンプする工夫もあった。物干しざおに似せたスズランテープに洗濯ばさみで作品を挟んで飾り、お互いの出来栄を鑑賞し合った。(写真19)

以下の㊦、㊧、㊨は野菜スタンプのアンケートの結果である。



㊨野菜スタンプの感想を教えてください。

- ・切る場所や切る方向でスタンプの形が違う。様々に切るとおもしろかった。
- ・さつまいもの野菜スタンプは形がきれいでした。
- ・食べたいと思っていたさつまいもが食べれない悲しさもあった。
- ・自分たちが育てたさつまいもがどんな野菜スタンプになるか授業の最初

から最後まで楽しめた。

- ・さつまいもの丸い形を衣類の模様に使った。切り口を平たく切ったり斜めに切ったりして工夫した。
- ・切り口の断面がでこぼこで思った通りのスタンプができなかったが、その形は想定外に面白かった。
- ・さつまいもをスプーンでくり抜いたりフォークでさして変化をつけたりするとおもしろそうだった。
- ・さつまいもの切る部分によって切り口の大きさが変化するので、何箇所かスタンプを押して順番当てゲームをするのも面白い。
- ・さつまいもを切ったときの匂いや色が新鮮で、改めてさつまいもを知るきっかけになった。

さつまいものスタンプは丸だけにしかないと思ったけど、切る場所や色、切り方を変えると様々な表現があると感じた。

- ・使った食材を処分するのはかわいそうな感じがした。
- ・自分たちが作ったさつまいもをおいしくいただいた。それを野菜スタンプの造形に使うこともできるのがいいなと思った。
- ・自分が切った野菜でどんなスタンプになるのか、ワクワクした。
- ・食べ物を粗末にしているような気がして、気が引けてしまう。さつまいもは丸にしかないから、面白いとは感じない。
- ・捨ててしまいそうな小さいもをスタンプとして利用することで、一生懸命育てたさつまいもを無駄なく活用することができたと思う。
- ・さつまいもをただ切ったままではなく、星や三角の形に工夫した。
- ・食べて楽しむのもいいけど、作品として残すのもいい。この作品を見ると「さつまいも作りが楽しかったな。」と思える。
- ・野菜たちのおかげでいい作品ができて、野菜に感謝したいと思います。

4-4 さつまいもの蔓を使ったクリスマスリース

(1) 教材について

クリスマスリースを作る目的は、クリスマスの行事に興味をもつことやクリスマスの雰囲気を感じながら製作を楽しむこと、何よりも育てたさつまいもの蔓をリースの素材として使い、愛着をもって製作に取り組むことにある。さつまいもの蔓がリースに変身する驚きを感じ、「また作ってみよう!」「他に何か作れるかな?」と表現の可能性が広がる教材である。既成の教材では味わうことのできない自然物との関わりが生み出す感動がある。

(2) 指導の実際と評価（1年生「保育内容の指導法」受講者より）

1、2年稲生ゼミが育てたさつまいもの蔓を使って、クリスマスリースを作った。

10月24日に畑から刈った蔓を2か月余り放置し、12月に蔓を曲げて輪っかにしようとする水分がなくポキポキと折れてしまい、リースにはできない状況だった。そこで、手洗い台に水を溜め、水に浸しておいた。そのことが功を奏し、蔓を輪っかにすることができた。最初は蔓を4、5重に巻きにして飾りの付けやすいポリウレムの土台を作った。なかなか思うように巻



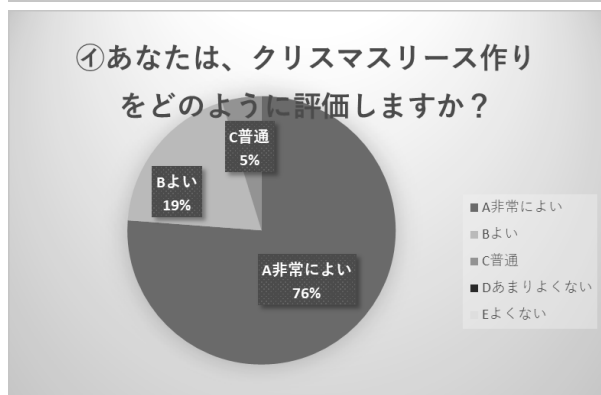
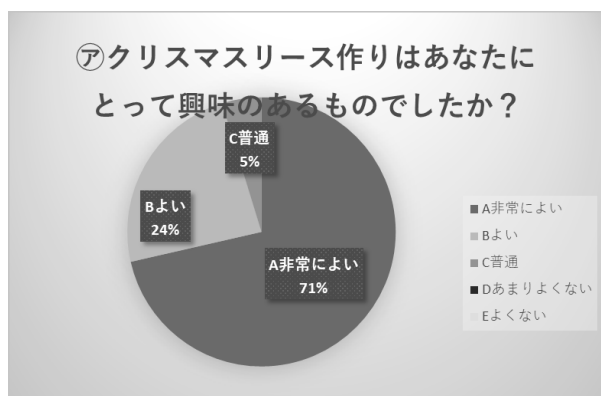
写真20 授業の様子

けなかったが、学生同士でアドバイスし合いながら取り組んでいた。(写真20) 飾りは、筆者がマンリョウ、松ぼっくり、どんぐり、栃の実、ユーカリの葉、椿の葉、麦、松の葉等を準備し、学生も自分の飾りたい材料を持参した。接着はホットボンドを用いた。製作の直前まで水に浸していたことが原因で、材料が蔓に接着し難くなり材料の落下が見られたが、学生は根気強く接着作業を行い作品を完成させた。(写真21)



写真21 クリスマスリースの作品

以下の㊦、㊧、㊨はクリスマスリース作りのアンケート結果である。



㊦クリスマスリース作りの感想を教えてください。

- ・蔓を巻くことが面白かった。大きさや太さがそれぞれ違いがあった。
- ・蔓を捨ててしまうのではなく、作品に仕上げてしまうことがよかった。
- ・畑から刈った蔓を暫く放置しておいた。1 2月になり蔓を曲げて輪っかにしようとするとう水分がなく「ポキポキ」と折れてしまい、リースにはできないと思った。そこで、水に浸しておいたのが功を奏し、何とか蔓を輪っかにすることができた。リース作りができてとても感動した。
- ・蔓が濡れていて飾りが付きづらかった。
- ・自分たちで作ったさつまいもの蔓を使ってリースを作ることがすごかったと思った。
- ・子どもにホットボンドを使わせるのは適当ではない。必要に応じて保育者が使うべきだと思う。
- ・様々な装飾や色の工夫があってよかった。
- ・蔓を通して季節の行事を味わうことができた。
- ・楽しい時間を過ごすことができた。
- ・どんぐりでうさぎを作ることが楽しかった。
- ・自分で作ったクリスマスリースは特別な感じがした。

5 考察

さつまいも栽培を通した教材の授業評価は前述の通り概ね良好であった。研究実践から得られた考察を以下に挙げる。

- ・栽培作業を通して、学生が物事をしっかりと捉えて変化を感じ、気づきを得ることができた。例えば、土の中の虫を描いた壁画制作では、同じ土の中でハサミ虫やダンゴ虫等といっしょにさつまいもも生長していることに気づき、自然や生命を相手にしていることを実感したと言える。実際に畑にいなかったもぐらを想像して描いた絵から思いを馳せて描くことの楽し

さを知り、葉が増えたり色が変色して枯れたりする様子を絵で表し、植物の変化を感じることができたと言える。

- ・野菜スタンプや蔓のリース作り等、育てたものを教材に生かすことができた。育てたものを使つての製作は楽しく、意欲的に取り組むことができた。作品が完成したときは喜びを感じ、より親しみが湧いた。蔓のリース作りでは、蔓を切り取った後に干し過ぎると輪っかにする時ポキポキと割れることが分かった。筆者自身、教材研究を十分に必要があると思った。この経験を今後に生かしたい。
- ・絵画の表現技術を高めることができた。頭や腕、足をパーツごとに描き、自由にポーズを作ること、人物を逆さまにしてうれしさや喜びを表現するなどの生き生きとした表現となった。この技法は紙版画にも生かすことができると思う。また、さつまいもを新聞紙でくるんだり葉を折り曲げたりして立体的に表す工夫をして、平面と立体を組み合わせたことによって鑑賞者の目を惹き付けた。さらに、さつまいもの生長とともに、葉を増やす、根を深く生やす、さつまいもの実を大きくする、葉が枯れて色が茶色になって穴が開く、などの時の経過を絵で表したことで、季節の移り変わりを体感できたと言える。

6 おわりに

午後のわずかな時間帯にしか日が当たらない畑で果たしてさつまいもが育つか、筆者にとって挑戦だった。土作りや苗植えの時期、品種等をJAの営農指導員や野菜作りに詳しい人に聞きながら学生と共に育てた。さつまいもが収穫できた時は本当にうれしかった反面、ホッとした。育ててみて改めて、栽培作業の感動が表現活動に繋がっていくと思った。卒業後に子どもに関わる仕事に就く学生に実践的な教材を学んでもらおうと授業で栽培活動を取り入れたが、今後も一人一人の学生が実践的な指導を身に付けていけるように、さらに研究を深めていきたいと考える。

＜付記＞

本稿には本学学生のアンケート、発言、写真を掲載しています。引用に際し承諾させていただいた皆さんには改めて感謝申し上げます。

引用・参考文献

- ・厚生労働省『保育所保育指針』チャイルド本社、平成29年告知
- ・磯部錦司著『自然・子ども・アート』フレーベル館、2007年
- ・石川浩著『精神としての身体』講談社学術文庫、1992年
- ・野村知子、中谷孝子編『幼児の造形』保育出版社、2002年
- ・槇英子『保育をひらく造形表現』萌文書林、2008年
- ・『行事&季節の製作アイデア10月～3月』世界文化社、2016年

